

寄り道

Cid

獣道

今日は暖かくって言うよりも暑い…散歩に出たら「死ぬ」そんな言葉すらあてはまりそう。

汗だくになって帰り、今日は引き籠る予定。

人生の脇道に逸れっ放しの私、、、意外と普通の道路を歩く。あまり脇道に入る事無く。だからこそ脇道は素敵におもえてしまう。普段とは違う景色が見れるのだから。そう偶の脇道にそれて歩いてみる。

今日、見つけたのは脇道と言うより獣道。

草が生い茂り、私を魅了した。

その道の入り口だと思われるところに、小学生らしい子供が立っていて。私と目が合うとその子供は目に見えない力で私の腕を引っ張った。私の足は歩いてきた道からその獣道に向いていた。

私は草を手で掃いながら、跳ぶように駆けるその子どもの後について行った。そこには草が生い茂るものの漫画に出てくるような空き地が広がっていた。そこには子供が何人が居たがそれぞれ遊んでいた。空き地を所狭しとかける少年・草を摘んで何かを作る少年・地面に絵を書いて遊ぶ少年・無駄に飛び跳ねている少年。何人かの少年がそこで遊んでいたのだ。

私はこの子どもたちの秘密基地か何かだと思いながら彼らの様子を眺めていたのだが、奇妙な事の気が付いた。彼らは何人もそこに居るのに誰独りとして誰かと遊んでいないのだ。そう彼らはひたすら独り遊びをしているのだ。

私は私をここに連れてきてくれた、少年にこの疑問をぶつけてみた。

「なんで皆、友達と遊ばないで独りで遊んでいるの？」

彼は不思議そうな顔をしてものの答えてくれた。

「皆？友達？ここには僕とお兄さんしか居ないよ。」

そう言うと彼はまた独り遊びを始めたのだった。

彼には他の子が見えていないのか？と思うものの違う子供のすぐ近くを通り過ぎたりするのに気が付かないものか？

よくみると皆、そっくりな顔をしていた。

なるほど彼らは兄弟のようだ。しかしさっきの言葉も納得できる。

「僕とお兄さんしか居ない。」他の子供は私の腕を引いて来た子供の兄である会話に私は入って居なかったのだ。

少し納得できた。

私は黙って彼らの様子を見ていた。

そこに、私の腕を引いて来た少年が私の前に立って不思議そうに私を眺めていたので、私はまた彼に聞いた。

「兄弟で遊ばないの？仲が悪いの？」

少年は悪戯に笑って答えた。

「可笑しなお兄さん。兄弟なんてここには居ないよ。まだ気が付かないんだね。」

私はよく解らなかつた。この子は何を言っているのか？

少し混乱して周りを見た、子供たちが私を見て笑っている。

皆、とても悪戯に。

私は少し混乱しながら、子供たちをよく見てみた。

私はこの少年達を見たことがあつた。リアルな世界ではなく、写真の中で。そう彼らは私自身の子供の頃の姿だった。

狐に抓まれた気分になり。顔を歪ませた。

その顔を見て少年の1人が私にこうやってきた。

「やっと気が付いたんだね。」
ニコニコと暖かく笑いながらそこに居た少年の頃の私は徐々に消えていき。

フと私は我に帰った。

私はもと歩いていた道に居た。そこに少年だった私の影は無く、いつもの道に足を直している私。
小学生だったり幼い頃の私だったら何も考えずにその獣道に入って行っただろうと思う。そこにどんな冒険が有るかもしれないと淡い期待を描きながら。

少しそれた其処に

少しそれた其処に。

其れは在った。

高くの伸びきれず頭を垂れ。

高い部分は沢山の緑。

それこそ頭が垂れても納得できる程に手を広げ、多方向に手を伸ばした。沢山の日の光を浴びる為。

低い部分は茶色い日陰。

日が当たらないためか、伸ばしたであろう手は皺くちゃになり変色していた。今にもまるで何も無かったかのように。

何よりも誰よりも高く伸びようとしていた「それ」。

頭が垂れなければきっと私の胸の高さまであっただろう。

否、きっと私なんかよりはるか大きく。

誰よりも高く伸びている為に「それ」の周りには誰も居らず、そっと静かに日の光を伸ばした手に集めている。

けれど、

どんなに立派に成ろうとも、

「それ」の周りには何も無く、誰も居ず、

静かに無機質が1つだけがそっと置いてある。

少しそれたそこだから、

どんなに立派に成っても、誰にも気が付かれずに。

少しそれたそこだから、

私は少し見ることが出来た。

少しそれたそこだから、

「それ」は今でも生きている。

少しそれた、、、？

本当に、それているのは誰？